

G・ライル『心概念』における「カテゴリー錯誤」の論理

清水明

1. はじめに

本稿の目的は、G・ライルの『心概念 The Concept of Mind』における「カテゴリー錯誤 category-mistake」(p.16¹ 12頁)(注1)の論理を明らかにすることである。言い換えれば、G・ライルは、次に述べる「公式教義」がカテゴリー錯誤を犯していると指摘することによって、それを批判し解体しようとするのであるが、その指摘によって公式教義はいかに批判され解体されることになるのか、その議論の道筋を明らかにし、その説得力を検証することである。

2. 公式教義 the official doctrine

G・ライルは『心概念』において、「心の本性とその位置づけ」に関し、広く流布している公式教義 the official doctrine と呼ぶことがふさわしいある教説が存在している」(p.11²、5頁)と述べ、

それは「主としてデカルトに由来する」(p.11³、5頁)がゆえに、それを「デカルト神話 Descartes' Myth」と呼ぶ。その公式教義とは「一般に、人間はすべて身体と心を持つ」「そしてこの身体と心は通常は互いに繋ぎ留められているが、心は身体の死後においても存続し機能し続けることができる」(p.11⁴、5頁)というものであり、言い換えればデカルト的な心身の二元論を指している。さらにG・ライルは公式教義をより詳しく規定し、公式教義における身体と心についての考えを、次のように特徴付ける。「身体は空間の中に存在し」「空間の中に存在する他のすべての物体を支配する機械的な法則に従う」(p.11⁵、5-6頁)。一方「心は空間の中には存在せず、その作用も機械的法則には従わない」(p.11⁶、6頁)。また、「身体的な過程や状態は外部の観察者によって調査することが可能であり、それ故人間の身体的生涯は」「公的な事柄である」(p.11⁷、6頁)のに対し、「ある人の心の働きを

他の観察者は覗き見ることはできず」「その経歴は私的である」(p.11' 6頁)。かくして、公式教義においては「人間は二つの並行する歴史を生き」「一方は公的な歴史、他方は私的な歴史である」(p.11' 6頁)ので、公式教義は「二世界神話 the two-worlds myth」(p.23' 22頁)とか、「二重生涯理論 the double-life theory」(p.18' 15頁)あるいは「二重生涯説話 the double-life legend」(p.52' 63頁)などと呼ばれることになり、極めつけは「機械の中の幽霊のドグマ the dogma of the Ghost in the Machine」(p.15-16' 11頁)と呼ばれるのである。

3. 「カテゴリー錯誤」の戦略

「機械の中の幽霊のドグマ」という表現は、ライルによれば「意図的な罵倒の意を込めて with deliberate abusiveness」(p.15' 11頁)語られている(注2)。確かに、デカルトは身体機械論を主張したのであるから、ライルのように心を実体ではないと考えれば、それは幽霊のようなものとなるだろう。そしてライルは、このドグマが「カテゴリー錯誤 category-mistake」(p.16' 12頁)を犯していると主張する。すなわち、このドグマは「心的生涯に関する諸事実 the facts of mental life」は「一つの論理的タイプないしカテゴリー(あるいはタイプないしカテゴリーの領域)に属している belongs to one logical type or category (or range of types or categories)」と想定しているのであるが、「実際には、それとは別なものに属している actually belong to another」(p.16' 12頁)とライルは主張するのである(注3)。もちろん、この主張は、ライル自身が言っているように「心的生涯に関する諸事実」を否定

するものではなく、ただそれが公式教義においては実際とは別のカテゴリーに属するものと想定されていることを批判しようとするものである。

しかし、このようなライルの「カテゴリー錯誤」を指摘するという戦略に対しては批判がある。G.J.ワノーソックは「もしある人がカテゴリーとは何であり、またいかなるカテゴリーが存在するのかということ述べる用意がなく、またそのみならず、実際に故意にそれを避けようとするならば、彼は果たして「カテゴリー」という用語を用いる資格を持っていると言えるであろうか」(注4)と言っている。ワノーソックがこう言うのは、カテゴリーという用語の採用は「実際よりも多くの事柄を達成できるかのような期待をわれわれに抱かせる」ので、第一に、公式教義が心的生涯に関する諸事実を誤って収容したカテゴリーとは何であり、第二に、本当はそれをどういうカテゴリーに収容すべきだったのかという二つの問題に、ライルは答えを出してくれろという期待を与えるのだが、実際にはこの二つの問題にライルは答えていないとみるからである(注5)。

ワノーソックが言うように、ライルはカテゴリーという用語を使用せずに自分の主張を述べることができたはずなのかもしれない。しかし、もし、上述の二つの問題に対する期待と不満を持つことと自身が、公式教義に感染している徴候であるとすれば、期待と不満の責任はライルにあるのではなく、むしろ期待と不満を抱く者の側にあるだろう。

期待と不安を抱く者にとって、公式教義が心的生涯に関する諸事実を誤って収容してしまったカテゴリーとは、心という実体に

起こる出来事というカテゴリーになるだろう。そして、心的生涯に関する諸事実が実体に起こる出来事のカテゴリーに収まらないとすれば、それは、たとえば、身体的行動の様態というカテゴリーにでも収められるということになるだろう。後者の立場を取れば行動主義ということになる。しかし、ライルの考えは、そもそも心的生涯に関する諸事実が単一のカテゴリーに当てはめられると想定することが誤りであり、したがってまた、心的生涯に関する諸事実をすべて単一に収められるカテゴリーなども存在しないのであってみれば、先の二つの問題に答えること自体がそもそも不可能なのである。

4. カテゴリー錯誤の例

ライルが「カテゴリー錯誤」の説明に用いた例は、確かに「実際よりも多くの事柄を達成できるかのような期待をわれわれに抱かせる」ほど、あざやかなものであった。それらの例を見ておこう。

(1) 大学を初めて訪れる外国人の例

「オックスフォード大学やケンブリッジ大学を初めて訪れる外国人」が、「多くのカレッジ、図書館、運動場、博物館、各学部、事務局など」に案内されたあと、「しかし、大学はいったいどこにあるのですか」と尋ねる、という例である (p.16、12頁)。これはライルが言うように「大学というものを、他の諸々の建物が属しているカテゴリーと同じカテゴリーに入れる」(p.16、13頁) という誤りである。大学とは、それら建物（およびその機能）の集合体でありそれら相互の有機的結合なのである。この例では、

大学を誤って入れてしまったカテゴリーは「クラスのメンバー」であり、正しくは「クラス」のカテゴリーに入れるべきだったことが明らかであるという意味で、直感的に明らかである。

(2) 師団の分列行進を見る子供の例

歩兵大隊、砲兵中隊、騎兵大隊の行進を見た後で、「いつ師団は出てくるの？」と尋ねる子供の例である (p.16、13頁)。師団は歩兵大隊、砲兵中隊、騎兵大隊などと同列のものではなく、それらから編成される全体なのである。

大学の例と師団の例はライルの言うとおり「同じ例」(p.16、13頁) である。いずれもクラス全体をクラスのメンバーと思いついて「カテゴリー錯誤」と言える。しかし、「さらに一例を挙げよう One more illustration」と言って付け加えられた次の例は、少し異なる例である。

(3) クリケット競技を初めて見る人の例

「クリケット競技を初めて見た人が」「投手、野手、審判、スコアラーの役割 functions が何であるかを学び、それでもなお「チーム精神 team-spirit」あるいは「団体精神 esprit de corps」の担い手は誰かと尋ねる例である。

この例では、カテゴリー錯誤を犯す人は誰がその役割 function つまりクリケット競技の職務 *functions* を引き受けているかということに着目しているが、チーム精神はクリケット競技の職務の一つではない。ライルは、チーム精神とは「大雑把に述べるならば」

「各職務が遂行される際の鋭敏keennessがある」(p.17、13頁)と言っている。職務を鋭敏に遂行する選手を「チーム精神を發揮する人」という意味で、チーム精神の担い手と言うことは可能であろうが、それは職務の一つではないのである。ライルも言うように、「ある職務を鋭敏に遂行することは二つの職務を遂行することではない」(p.17、13頁)からである。しかしまた、先の例のように、チーム精神は投手、野手、審判、スコアラー等々、クリケット競技関係者の職務を収容するクラスではない。したがってこの例はクラスとそのメンバーのカテゴリ錯誤の例ではない。チーム精神は職務というカテゴリに入れるべきものではなく、職務の遂行の仕方というカテゴリに入れるべきものであったのである。しかし、この例も、誤って入れてしまったカテゴリと本来入れるべきカテゴリがはつきりしており、その意味で、カテゴリ錯誤を犯していることが直感的に明らかである。

以上三つの例を総括してライルは、これらの例には共通した特徴があり、それは「大学、師団、チーム精神、などの概念の適切な使用法を知らない人が犯す誤り」(p.17、14頁)であり、「私たちの言語の語彙のある種のを適切に使いこなすことができなかつた」(p.17、14頁)ことから生じる、としている。「大学、師団、チーム精神」は比較的良好に用いられる語彙であり、それらの語彙を適切に使いこなすことができなような人は希であろう。大学に初めて訪れた外国人や分列行進を初めて見る子供、クリケット競技を初めて見る人などである。これらの人々がこれらの語彙を適切に使用できていないことを見て取ることは、たいていの人は

には容易である。これらの例が直感的に明らかであるのは、われわれがたいていの人の立場に立っているからだと言えよう。

後にライルは第三章で、「意志作用 volition」は「なじみ深い日常的概念 familiar and everyday concept」ではなく、人為的な概念「artificial concept」でありかつ専門的概念「technical concept」であると指摘し、さらに専門的概念には有用なもの無用なものがある、意志作用は「フロギストン」や「動物精気」などと同様に無用な概念だと論ずることになる (p.62、79頁)。「意志作用」が無用な概念であるかどうかについては別の機会に検討する予定であるので、ここでは、日常的概念と人為的概念および専門的概念の区別について、それはいかなる基準によってなされているのか明確ではないという点だけを指摘し、その点を念頭に置きながら、ライルが示したカテゴリ錯誤の例を検討してゆきたい。

「大学、師団、チーム精神」などは私たちにとってはなじみ深い日常的概念ではあるが、人為的概念であり、かつまた、専門的概念ではないだろうか？ すると直感的に明らかである例に共通している特徴とは、日常的概念か専門的概念かという観点は無関係なく、ひとまずは、私たちにとってなじみ深い概念の使用を誤る例だということになる。カテゴリ錯誤を引き起こす原因という観点から言えば、この種のカテゴリ錯誤を犯す人はたいていの人にとってなじみ深い概念になじみ深くはなかつたのである。

さて、これら三つの例に続けてライルは「理論的な興味を喚起するカテゴリ錯誤」(p.17、14頁)の例を挙げる。「理論的な興味」という表現からは、公式教義が犯したカテゴリ錯誤を念頭に置いていることが期待される。この例については、「少なくとも

もなじみ深い状況においては概念を完全に使いこなすことができ「る」のに、「抽象的にものを考える際にはその概念をそれが属していない論理的タイプへ配置してしまいがちな人々」の犯す誤り (p.17、14頁)、とライルは言っている。概念ではなく状況が「なじみ深い familiar」とときには犯さない誤りを、抽象的に考える際に誤る、と言うのである。例に挙げられている概念は「イギリスの政体 the British Constitution」と「平均的納税者」とである。

(4) 「イギリスの政体」の例

「ある政治学の学生がイギリス、フランス、アメリカ合衆国の政体間の主要な相異を学び、そして内閣、議会、各省、司法部、英国教会の間の相異やそれらの間の関連をも学んだ」。「しかし彼は、英国教会や内務省とイギリスの政体との関係についての質問には、なお当惑する」という例である (p.17、14頁)。

学生は当惑するだけでまだ質問には答えていないのだからカテゴリ誤りを犯した発言をしていないのであるが、その当惑の原因はカテゴリ誤りにある、とライルは言うのである。「イギリスの政体」は「英国教会」や「内務省」と同じ論理的タイプの言葉ではない (p.18、14頁) とライルは言っている。そしてさらに「政治学の学生は、英国の政体を他の機構と同類のものであると考える限り、それを不可思議な神秘的機構と考えざるをえなくなる」と言い、学生が犯した錯誤は「英国の政体」を収めるべきカテゴリを間違えたカテゴリ誤りと考えるのである。

しかしこの例をより詳細に検討すれば、学生は「イギリスの政体」が「英国教会」や「内務省」と同列のもう一つの機構と考え

ている (その限りではここにカテゴリ誤りがある) ので、それら機構間の関係と同じ関係が「イギリス政体」と英国教会や「内務省」との間にもあるかのようになっているのである。したがって学生が犯している錯覚は、正確には、同じ論理的タイプ間の関係 (各機構間の関係) と異なった論理的タイプ間の関係 (機構と政体の関係) の混同である。ここには確かにライルの言うカテゴリ誤りが含まれている。しかし、この例は機構 institution と政体 constitution という意味の類似した言葉が使われているがために引き起こされた混同という見方も可能である。政体 constitution は国全体の政治的機構の集積体という、機構ヒエラルキーの頂点に立つ機構であるので政体 constitution という特別の言い方があるが、機構の一種であることに間違いはなく、議会や各省、英国教会などの機構も、その内部構成を見ればより小さな機構の集まりであろうから、「英国の政体」と「英国教会」や「内務省」との論理的タイプの相違は、ただ機構ヒエラルキーにおける階層の違いであると言える。異なる階層にある機構が機構 institution と政体 constitution という異なる言葉で表現された、そこに錯誤を招くもう一つの要因があるのではないだろうか。単に「イギリスの政体」を「英国教会」や「内務省」と同列の機構とするカテゴリ誤りを犯しただけでは、「イギリスの政体」を「不可思議な神秘的機構」と見なすことはないであろう。もう一つの錯覚要因があればこそ、「イギリスの政体」は「不可思議な神秘的機構」に見えるのである。同じ機構でありながら、他の機構とは別の関係を結んでいる特殊な機構であると…。それこそがイギリスの政体という機構 institution を政体 constitution という特

別の言葉で呼ぶ理由なのであると…。

ライルは「イギリスの政体」の例を、なじみ深い状況では適切に使用できる概念を抽象的に考える際には誤る例として挙げていく。なじみ深い状況では適切に使用できる心的生活の諸事実を述べる表現を、理論的に抽象的に考える際には誤るといって、公式教義の場合に通じるものとして、これらの例を取り扱おうとするのである。しかし、これまでの検討ではなじみ深い状況とは、同じ機構ヒエラルキーのなかで使用する場合であり、抽象的に考える状況とはそのヒエラルキーの階層を跨って使用する場合であった。イギリス、フランス、アメリカ合衆国の政体間の主要な相異を学ぶとか、内閣、議会、各省、司法部、英国教会の間の相異やそれらの間の関連を学ぶというのは、それほどなじみ深い状況とは言えない。すでに政治学の何らかの理論を背景に持つ状況であろう。機構ヒエラルキーの異なる階層間の関係は、複雑ではあるが、抽象的と表現すべき状況ではない。

われわれがこのように、ライルの挙げた例を子細に検討するのは、公式教義が犯しているというカテゴリ錯誤とはどのような錯誤であるかを、正確に見極めたいからである。また、ライルがカテゴリ錯誤の例として挙げたものに加えたライル自身の説明が不明確だからでもある。「イギリス政体」の例はライルの説明の不明確さ、いやむしろ不適切さ、を示している。「イギリス政体」の例は、カテゴリ錯誤が起こるのは、ライルが説明するよりに「なじみ深い—抽象的」という状況の相異によって起こっているのではなく、同列の機構ヒエラルキー内での話題という単純な場合には理解を示す学生が、機構ヒエラルキーの階層を跨いだ

話題になると、機構ヒエラルキーの構造についての理解が行き届いていないために当惑し、その結果カテゴリ錯誤を引き起こすという例であり、しかも、学生は当惑するものの、明示的にはまだカテゴリ錯誤に基づく発言は行っていないのである。カテゴリ錯誤が当惑の原因であろうか、それともむしろ当惑を引き起こしている不理解がカテゴリ錯誤を引き起こす原因になり得るということではあるまいか。

(5) 「平均的納税者」の例

「ジョン・ドー氏はある種の議論において「平均的納税者」について有意味に語る仕方を知っている」が、「彼は街でリチャード・ロー氏に出会うことはありうるが「平均的納税者」に出会うことはあり得ないのはなぜかと問われると当惑する」(p. 18, 14頁)という例である。

ジョン・ドー氏とカリチャード・ロー氏というのは、訴訟で当事者の本名が不明のとき用いる男性の仮名である。誰かある特定の人を指す名前である。本名がわからないので仮に呼んでおく名前である。しかし「平均的納税者」が何を意味しているのか、特にその名前としての働きを説明できる人は少ない。たいていの人が先の問いに当惑するのではないだろうか。はたしてこれは、たいていの人がカテゴリ錯誤を犯しているということなのだろうか。

「平均的納税者」が何を意味しているのか、一応考えておこう。「納税者」が「納税すべき義務を負っている人」を意味するのか、実際に納税した人を指すのか、はっきりしないが、仮に後者だとすると、たとえば昨年度税を納めた人は確定できる。では

そうした人々の属性の何を平均化するのだろうか。それは「平均的納税者」という言葉を使って論じる話のテーマによって異なるに違いない。納税者全体の平均身長などを算出してもあまり意味はない。納税者全体の顔写真から「平均的納税者」の顔を合成してもやはりあまり意味はない。おそらく、納税者はどのような家族構成なのか（家族数の平均は何人か、配偶者を持つものはどのくらいの割合で存在するか等々）、年齢はどのくらいか、年収はどのくらいかなどの特性が話題とされるであろう。いずれにせよ、その時の話題に応じて取り出されてきた納税者の諸属性の平均値から想定される大まかな納税者像が平均的納税者なのである。取り出された属性の平均値は客観的なデータとして存在する、しかしそれらのデータからどのような人物像を想定するかは、想定する人によって少しずつ異なるであろう。すなわち「平均的納税者」にはそうした主観的要素がつきまとうのである。しかし少なくとも、それは特定の人物を指し示す名前ではない。したがって、平均的納税者に街で出くわすことはあり得ない。さて、カテゴリー錯誤はどこにあるのだろうか。平均的納税者を特定の人物を指す名前であると誤解すれば、それは存在しないものを存在する人物というカテゴリーに収めることであるからカテゴリー錯誤であると言える。しかし、以上検討してわかったことは、先の質問にたいいていの人が答えることができないのは、「平均的納税者」という言葉の働きを説明できないことが主たる原因だということである。

ライルは「イギリスの政体」の例で、カテゴリー錯誤のせいで「イギリスの政体」を「不可思議な神秘的機構」(p.18、15頁)と

考えざるを得なくなると言ったのに続けて、「平均的納税者」の例では、「平均的納税者」をジョン・ドー氏と同類の市民と考えるかぎり、それを「どこにでもいるがしかしどこにもいない幽霊」(p.18、15頁)と考えざるを得なくなると言い、カテゴリー錯誤を犯している公式教義を「機械の中の幽霊ドグマ」と呼ぶことの理由であることを暗示している。しかしこの暗示は誤解を招きやすい。本当は実在しない「心」を実在するもののカテゴリーへ入れてしまったという類のカテゴリー錯誤が公式教義にあると思わせているからである。問題をこのように捉えてしまえば、では「心」を収めるべき正しいカテゴリーは何かという問題をたてる誘惑は避けがたい。しかし、先に見たように、「心的生涯に関する諸事実」を単一のカテゴリーに収めることができると想定するところに公式教義の根本的な誤りがあり、それに基づいてカテゴリー錯誤が発生するのだとすれば、われわれはむしろ公式教義が犯しているというカテゴリー錯誤の一つ一つを吟味し、それがいかなる想定から発生するものであるかを慎重に分析する必要があるのである。

ライルの挙げたカテゴリー錯誤の例を検討してわかったことは、カテゴリー錯誤を引き起こす状況には様々なものがあり、そこで起きている「誤り」や「当惑」は、確かにカテゴリー錯誤が原因の一部になってはいるが、そのほかにも同時に誤りや当惑の原因となるものが潜んでいるということであった。あるいはむしろ、種々の誤りや当惑がカテゴリー錯誤を引き起こしているという事実である。

5. カテゴリー錯誤の源泉

ライルは「一連の根本的なカテゴリー錯誤 a family of radical category-mistakes が二重生涯理論の源泉となっていることを示すこと」(p.18, 15頁)が『心の概念』での彼の目的であると言っている。公式教義が犯しているカテゴリー錯誤は、果たしてライルが例に挙げたようなカテゴリー錯誤であろうか？

まず、錯誤であることが直感的にわかるカテゴリー錯誤と、なかなか錯誤であることがわからないカテゴリー錯誤とがある。ライルが挙げた例のうち最初の三例はいずれも錯誤であることが直感的にわかりやすいカテゴリー錯誤であるが、「イギリスの政体」の例と「平均的納税者」の例は錯誤を犯しているらしいことはわかるがそれがどのような錯誤かは直感的にはわからないカテゴリー錯誤であった。しかし、仮に、公式教義が犯しているカテゴリー錯誤を、「心」を収めるべきカテゴリーを誤ったものと考えるならば、誤って収めたカテゴリーは実体であり、正しく収めるべきカテゴリーは実体以外のカテゴリーだと言うことになるが、このように理解されたカテゴリー錯誤は、私が思うに、錯誤であることが非常にわかりにくい錯誤、犯している当人は錯誤とは思っていない錯誤、したがってライルの挙げている例とは異なる錯誤、すくなくとも直感的にわかりやすいかどうかという点に関しては、異なるカテゴリー錯誤であると言わなければならぬ。

しかし、何度も述べたように、公式教義の犯したカテゴリー錯誤とは単一のカテゴリーには収められない「心的生涯の諸事実」を単一の「心」というカテゴリーに収めたものだとするならば、公式教義が実際に犯したカテゴリー錯誤そのものが単一のもので

はない。

ライルは「一連の根本的なカテゴリー錯誤 a family of radical category-mistakes」と言っている。われわれとしてはこの表現を重視すべきであろう。公式教義が犯した諸々のカテゴリー錯誤は一つの家族のようにまとまってはいるが、そこに単一のタイプのカテゴリー錯誤があるわけではないのである。ライルの挙げた例でもすでに様々な種類のカテゴリー錯誤があった。さらに様々なものがあるかもしれない。もちろん一つ一つのカテゴリー錯誤は、それがカテゴリー錯誤と言われる以上、何ものかをそれを本来収めるべきカテゴリーとは別のカテゴリーに収めたものである。

しかし、種々のカテゴリー錯誤が誤りを犯したカテゴリーは共通のものではないであろうし、それぞれのカテゴリー錯誤を引き起こす原因も多種多様であろう。第二章以下で暴かれるはずの公式教義が犯しているカテゴリー錯誤の一つ一つを検討することによって、その点を明らかにしてゆきたいが、本稿はこうしたカテゴリー錯誤を暴く戦略というものの一つの側面を照らすことでひとまずは満足したい(注6)。

ライルは公式教義の誤りが一連のカテゴリー錯誤にあるとして、さらにそのカテゴリー錯誤の源泉について論じている。ガリレイおよびデカルトの機械論的力学の成功の一方で、デカルト自身は「宗教的かつ道徳的な人間として」「人間の本性は時計仕掛けとは複雑さの程度においてしか異ならない」という帰結を受け入れることができず、「心的なものは機械的なものの一変種ではあり得ない」(p.19, 16頁)と考え、空間内に存在するものについて機械論的な因果法則が成立するのと同様、心的なものについても機

械論的な因果法則が存在するとする「準因果論的仮説 a para-mechanical hypothesis」を唱え、そうした心的なものの領域として非空間的な「心」を想定し、そこにおいて原因と結果を有する「心的過程」なるものを想定した、と言う。こうして「物的なものと心的なものとの間の相異は、「もの thing」、「素材 stuff」、「属性 attribute」、「状態 state」、「過程 process」、「変化 change」、「原因 cause」、「結果 effect」などというカテゴリーの共通の枠組みの中における相異として説明された」(p.19、16頁)とライルは言う。この箇所ではライルがカテゴリーとして考えているものが例示されているのが注目されるが、さらに注目すべきは、「心的なもの」が「物的なもの」とカテゴリーの「共通の枠組み」に入れられた、としている点であろう。心的なものについても、物的なものと同じカテゴリーを用いて記述されることになったと言っているのである。それは、ライルにとっては当然批判されるべきことで、たとえば「心的過程」などという言葉も、適切ではないのである。物的過程が存在するように、一般的に「心的過程」なるものが存在するわけではない。「心的なもの」は「過程 process」という一つのカテゴリーではなく、いろいろなものである。後に第四章で、従来「情緒 emotion」という言葉でくくられてきた一群の「心的生活の諸事実」を分析しているが、そこで見いだされるものは、「過程」と呼ぶものも確かに一部あるが、その大部分は「過程」とは呼べないものである。

その意味で、ライルが「カテゴリー錯誤の源泉」の節の後半で述べた、異種のカテゴリーのものについて述べた文を連言や選言で結ぶとおかしな表現になるという指摘、およびそれに続く幾つ

かのライルの主張には注意が必要である。

ライルは、公式教義は「身体と心との両方が存在し、物的過程と心的過程との両方が生起し、かつ、身体的な運動には機械的な原因と心的な原因の両者が存在することを主張する」が、「心的過程が生起する」という表現と「物的表現が生起する」という表現を連言や選言で結合することは、ちょうど「彼女は帰宅して涙の洪水と椅子かごに身を沈めた」と同じような奇妙な連言や「彼女は帰宅して涙の洪水かまたは椅子かごかのいずれかに身を沈めた」というばかげた選言を行うようなものだという(p.22、20頁)。

ここでライルは付言して、「心的過程が生起することを私は否定しない」と言い、言いたいのはただ「心的過程が生起する」という表現は「物的過程が生起する」という表現と同じ種類のことを意味しているのではないということ、従ってその二つを連言ないし選言の形で結合することには意味がない」ということだ、と言う。こうしたライルの発言は、ただそれだけを取り出してみれば何も問題はないが、公式教義の行えばかげた連言や選言と並べて置かれると、ライルが言う「心的過程が生起することを私は否定しない」という発言は公式教義が連言や選言の一部として言う「心的過程が存在する」と同じ意味で言っているかのように思われてしまう。ライルはそうした心的過程の例として「長除法を遂行すること」や「冗談を言うこと」を挙げている(p.22、20頁)が、それに付け加えて、「しかしすべての心的生活の諸事実が心的過程なのではない」と付け加えるべきだったろう。公式教義にとって「心的生活の諸事実」はすべて「心的過程」であるが、ライルにとっては「心的過程」は「心的生活の諸事実」のほんの一

部をなすに過ぎないのである。

さらに加えて、ライルが「一つの論理的な語り方において心が存在すると述べ、別の語り方において身体が存在すると述べるとしてもそこにはいかなる問題も生じない」(p.23、21頁)と言ひ、「それらは「存在する」という語の二つの異なった意味を示している」(p.23、21頁)と説明するとき、こうした発言はむしろ誤解を招きかねないものである。確かにライルにとつても「心が存在する」と述べる「一つの」論理的な語り方は存在するであろう。しかし、「心的生活の諸事実」の多くにとつては「心が存在する」という表現は不適切であるはずである。また、「心が存在する」と語りうる場面においても、その「存在する」という言葉の意味は一樣ではないであろう。「二つの異なった意味を示している」という言い方は、「心」を収めるべき、「実体」ではない別のカテゴリーを暗示するように思われる。「存在 existence」という語は「色の付いた coloured」や「性別のある sexed」というような属名語 generic word ではなくとつて指摘 (p.23、21頁) や、「水位が高くなる the tide is rising」「望みが高くなる hopes are rising」「平均死亡率が高くなる the average age of death is rising」における「高くなる rising」の意味はそれぞれ異なった意味を示しているという指摘 (p.23、21頁) をしているにもかかわらず、「存在する exist」の意味が二つしかないかのような言い方は、残念であった(公式教義こそが、「存在する」の意味が二つあるとする説ではなかったか)。あるいはこれがワーノックの言う「ライルに残る極端で、はるかに単純である理論の残滓」であり、ライルの著作に幽霊のごとく存在する「行動主義テーゼ」(注7)であ

るかもしれない。

ただしライル自身は、観念論も唯物論も「心が存在するかさもなければ身体が存在する(しかしその両者が共に存在することはない)」というカテゴリー錯誤を犯した選言を前提とすると言ひ、両者とも「実は不適切な設問の仕方に対する答えに過ぎない」(p.22、21頁)と考えるのであるから、すくなくとも唯物論の一種としての行動主義は認めなかったであろう。

心を実体というカテゴリーに収めるのが誤りならば、どういふカテゴリーに入れるべきかという問題の立て方は、したがって、ライルによればそれがそもそもカテゴリー錯誤を犯している可能性があり、公式教義に汚染されているのである。しかしながら、公式教義がカテゴリー錯誤を犯しているということは、カテゴリー錯誤の実例を挙げることによって証明されない。ライルの挙げたカテゴリー錯誤の例は公式教義が犯しているカテゴリー錯誤にはない直感的なわかりやすさを持っている。その例があまりにも鮮やかなので、公式教義もそれと同様の誤りを犯しているのだと言われると、あたかもすでにそれが証明されたかのごとく錯覚する人もいるかもしれない。しかし、それは誤りである。ライル自身も、公式教義がカテゴリー錯誤を犯しているかどうかは『心の概念』全編を通じて初めて証明されるべき事柄だと言うことを十分知っていた。彼は言う。「以下の諸章において、私は、この公式教義からは論理的に不合理な帰結が導出されるということを示すことによつて、この教説が一群のカテゴリー錯誤にもとづくものであるということを証明しようと思う」(p.23、21頁)。この箇所でも、公式教義が犯していると考えられるカテゴリー錯

誤は単一のものではなく「一群の a batch of」と言われていることに注意しておきたい。

ライルは「カテゴリー錯誤」の源泉として、デカルトとその同調者たちが公式教義を採用した動機（第三章でそれは「機械論という憑きもの The Bogy of Mechanism」(p.76, 100頁)と呼ばれることになる)を語っているが、われわれとしては、そうした動機以前に、個々のカテゴリー錯誤を招く要因になったものを、それぞれ個々別々の問題状況において、探ってゆかなければならない。そうした探求の積み重ねによってこそ、公式教義を採用する動機も一層明らかになってゆくだろう。ライルが第一章最後の「歴史的注 Historical Note」で触れているように、公式教義はデカルトのみに由来するものではない。われわれとしてはデカルト由来の動機よりさらに根深い動機が公式教義には潜んでいるのではないかと疑ってみる必要がある。

注

1. G・ライル『心概念 The Concept of mind』からの引用は、(原書ページ、翻訳頁)の形式でその箇所を示す。翻訳はほぼ邦訳書坂本百大、宮下治子、服部裕幸訳、みすず書房刊)に従ったが、地の文との続き具合から多少手直したところもある。
2. もちろんこの罵倒は、「私自身が永らくこの見地の犠牲者の一人であった」(p.9, 4頁)がゆえに、まず第一義的にはライル自身の過去に向けられたものと解すべきであるが、歴史的には挑発的なものと受け取られた。
3. この箇所の訳文は邦訳書を多少手直してある。変えたのは二カ所、Facts が複数形であることを明示して「諸事実」としたところと、one logical type or category の one を明示的に「一つの」と訳出した点である。
4. G.J.Warrock, *English Philosophy since 1900*。引用は坂本百大・宮下治子訳『現代のイギリス哲学』(勁草書房刊)を借りた。引用箇所は同訳書 p.133。
5. ワーノック前掲書(訳書 p.132-133)。
6. 本稿はG・ライル『心概念』全体の解釈をもくろむ一連の論考の最初をなすものである。本稿では同書の第一章「デカルトの神話」を主として扱ったが、順次、続編を発表する予定である。
7. ワーノック前掲書(訳書 p.138-139)。